新潟県粟島における
学習者のプライベートジオグラフィーと地域の関係
―「場所に対する地理的センス（sense of place）」概念を中心に―

Yang JaYeon（ヤン・ジャヨン）

Ⅰ．はじめに

地理学の観点の一つである人間主義地理学（Humanistic Geography，人文主義地理学）を取り入れた人間主義地理教育は，学習者を「地理的自我（geographical self）」[1)]として認識しはじめている（Cho and Kwon，2005）。一人の個人である学習者は，社会化の中で経験する日常生活世界を通して「自我」を形成して行く。場所・地域・空間は，その日常生活世界の具体的ながら標準的な根拠となる。これらは，個人が社会的存在として行為・意思決定する時に，一つの動機として影響を与えたり，決断のきっかけとなる（Kwon，2011）。

代表的な人間主義の地理教育学者であるJ. Fienは，学習者の主観的認識である「プライベートジオグラフィー（私的地理，private geography）」を示しながら，それを構成している日常生活内の地理的経験が重要な意味があると主張した。そして，そのプライベートジオグラフィーを拡張していくことが地理教育で大事であると主張した（Fien，1983）。

プライベートジオグラフィーが構成されるためには，身近な地域的スケールからグローバルスケールまで様々なスケールからの暗黙的，直・間接的空間経験が重要である。さらに，様々な経験の中，プライベートジオグラフィーが専門的な地理学者たちが作った地理世界（Seo，2005）である「パブリックジオグラフィー（公的地理，public geography）」と出会い，この二つがお互い正のフィードバックをすることが個人の地理的自我拡張に影響を与える。

このような，人間主義地理学の側面から地理教育の目標を達成するためには，パブリックジオグラフィー（代表的に，学校地理）とプライベートジオグラフィーの正のフィードバックのはじまりとして学習者のプライベートジオグラフィーを理

解する必要がある。特に，学習者のプライベートジオグラフィーは学習者の生活世界と影響がある（Kwon，2011）。その生活世界の中で一つである地域が学習者のプライベートジオグラフィーにどのような影響を及ぼしているのかを分析した研究は，その必要性があるにもかかわらず多くない。

このような問題の所在を踏まえ，本研究の目的は，プライベートジオグラフィーの代表的な概念の中の一つである「場所に対する地理的センス（sense of place）」[2)]（Kwon，2015，p. 144）を中心に，粟島の学習者のプライベートジオグラフィーを分析し，「地域」と学習者のプライベートジオグラフィーの関係を明らかにすることとする。

Ⅱ．研究課題と方法

粟島の学習者のプライベートジオグラフィー（場所に対する地理的センス）が，学習者の生活世界の中で一つである「地域」とどのように関連があるかを明らかにするために，以下の手順により検討を進める。

第一に，ライベートジオグラフィーの代表的な概念の中の一つである「場所に対する地理的センス」に関した地理学及びほかの分野からの先行研究を分析する（第Ⅲ章）。第二に，地理教育における「場所に対する地理的センス」概念を取り入れる先行研究を検討し，聞き取り調査の具体的な質問と活動を構想する（第Ⅲ章）。第三に，粟島浦小学校5年生，中学校1～3年生を対象として，聞き取り調査を実施し，分析する（第Ⅳ章）。

特に，第二の段階に関して，粟島浦小・中学校の学習者の「場所に対する地理的センス」を理解するための質問は，Kim and Yoon（2013）が開発した「場所に対する地理的センス」測定道具をもとにした。この研究では，「場所に対する地理的センス」に関する先行研究の動向を把握し，「場所に対する地理的センス」を「人間を巡った環境に対する認知，感情，行動が合わさった総合的な体系」として理解できることを明らかにした。それをもとに，３つの構成要素である認知的，情意的，行動的領域を前提とし測定道具を開発している。その３つの構成要素（「場所に対する認知（認知的領域）」，「場所に向けた愛着（情意的領域）」，「場所のために実践（行動的領域）」）の枠組をもとに３つの質問と活動を構想し調査を実施した。

インタビューの実施は，2017年9月4日（小学校5年生３人），5日（中学校1年生７人），6日（中学校2年生４人，3年生４人）に行われた。各学年別に昼休み時間を通して，約25分間行われた。

Ⅲ．　プライベートジオグラフィーとパブリックジオグラフィー

1．人間主義地理学と地理教育

1970年代の半ばになると，実証主義による科学的な研究方法は価値問題に適用できないことを指摘し，人間の経験や感情による価値探究に注目する人間主義に基づく地理学が現れた。人間主義に基づく地理学では，個人が場所や環境に対し感じる主観的感情と価値に目を向けている（金，2012）。このような実証主義から人間主義えの変化は，地理教育にも影響を与えている。前述したように、代表的な人間主義の地理教育学者であるFien（1983）は，人間主義に基づく地理学から影響を受けた地理教育の具体的内容・方法として，私的地理（本研究では、「プライベートジオグラフィー」），学習者中心接近，認知と情意的領域の総合教育を挙げる（金，2012）。

その中の一つとして，「プライベートジオグラフィー」は，David Lowenthalが1961年にはじめて語った。Lowenthal(1961)は，各個人が身につけている環境への信仰，好み，同期の本質の起源について推測した。そして，「各個人の環境に対する知識と価値が個人化された集合体」を「プライベートジオグラフィー」と定義した。また，各個人の経験・学習・想像は，必然的に経験を基にしていることから，プライベートジオグラフィーの主観的な要素に関心を持ち，経験するすべてのことが日常生活と連携があること（Ryu，2002）を強調している。

さらに，Kwon（2015）によると，プライベートジオグラフィーは「日常生活の経験様式として存在している地理であり，個人の主観的な地理認識か環境に対する感情的反応であり，学生が日常生活の中で暗黙的に形成している地理知識」（p. 143）と語る。そして，南（1999）は，プライベートジオグラフィーは「児童の生活世界，経験様式として存在する地理でありながら，児童たちのプライベートジオグラフィーは学問としての地理学的概念及び方法などの接触を通して洗練されて，拡張される」（p. 108）と言っている。つまり，プライベートジオグラフィーは，人の行動やアイデンティティの無意識的な部分（記憶，価値，機能などを含め）の一部として構成していて，それから人間が環境の中で効果的に行動するようにしている。そして，何かに対しする人の意思決定に（空間的側面から）影響を与えている（南，1999）。

このようなプライベートジオグラフィーと相対的な概念が，専門的な地理学者たちが作った地理世界（Seo，2005），多数の学者が共有して制度的に公認された知識（Kwon，2015）が「パブリックジオグラフィー」である。

このような「プライベートジオグラフィー」と「パブリックジオグラフィー」の関係に対してFien（1983）は，どちらかが無いと他の概念も正しく理解することができないので，どちらも地理教育では重要な意味がある（Kwon，1997b）と述べている。さらに、Kwon（1997a）と南（1999）も，児童たちにとって自分のプライベートジオグラフィーに内包されている秩序と意味を発見することを助けるたにもパブリ

ックジオグラフィー（地理学の研究対象と方法）を活用する必要があること（Seo, 2005）を指摘している。

以上を踏まえて，Fien（1983）が人間主義地理教育の目的として主張した「プライベートジオグラフィーの拡張」することは，プライベートジオグラフィー（場所に対する地理的センス）を理解し，パブリックジオグラフィー（学校地理）とのお互い影響を受けながら正のフィードバックをして拡張できる。そのために学校地理の役割は，学習者のプライベートジオグラフィー（場所に対する地理的センス）を理解し，それを基盤とした地理授業（パブリックジオグラフィー）を構想する必要がある。

2. プライベートジオグラフィーを表す「場所に対する地理的センス」

Kwon(2015)は、「場所に対する地理的センス」は，「プライベートジオグラフィーを表すの代表的な例である」（p. 144）と述べている。場所に対する関心，愛着，アイデンティティ，地域意識など場所と関連した様々な特性を含める包括的な用語である（Seo，2005）。つまり，人間と空間環境との関係を説明する最も一般的な概念の中で一つとして理解できる（Jorgensen and Stedman，2001）。この概念に対して人間主義地理学から代表的な研究はトゥアン（1977）とレルフ（1976）がある。

そして，IGU-CGEの1992年「地理教育国際憲章」にもこの概念は登場している。「4. 地理学の教育への貢献」 の「１）地理学と教養」の中で，「（1）地理的知識の習得と理解の深化に関する到達目標」の中で以下の通りである。

> “ウ．場所の特質を読み取る方法（場所に対する地理的センス）を習得するための地表磁の主要な社会・経済的システム｛農業，集落，運輸，工業，貿易，エネルギー ，人口など）に関する知識と理解。
> 　なお，場所に対する地理的センスとは，一方では人間の諸活動に対する自然，的諸営力の理解ができることであり，他方では多様な文化的価値観，信仰，技術的，経済的，政治的システムにともなう環境改変のための多様な方法を理解できることである。”

このような「場所に対する地理的センス」は，地理教育及び地理学はもちろん，環境心理学からの研究もなされている。前述したように，トゥアンやレルフなどの文化地理学者からの「場所に対する地理的センス」 が登場し論議が始まった以後の研究からは，「場所に対する地理的センス」の構成要素を体系化して理解しようとする研究が行われていた。

Jorgensen and Stedman（2001）は 「場所に対する地理的センス」を人間と空間環境との関係を説明する最も一般的な概念の中で一つとして理解し，それを「場所に対

するアイデンティティ（place identity）」[3)]，「場所への愛着（place attachment）」，「場所への依存（place dependence）」を含むこととして概念化した（Kim and Yoon，2013）。

第１表 Jorgensen and Stedmanの「場所に対する地理的センス」 構成要素

構成要素	場所に対するアイデンティティ（place identity）	場所への愛着（place attachment）	場所への依存（place dependence）
意味	場所を経験する主体が特定な空間的環境に対して持っている認知，信頼，知覚，考えなどを意味	特定な空間に対して個人が持っている感情的連携	他のところと比較して，特定の場所が持っている長所に対して経験した主体の自覚
代表研究	レルフ（1976）	トゥアン（1977）	Williams and Vaske（2003）

（Kim and Yoon（2013）をもとに筆者要約）

さらに，環境心理学的接近から「場所に対する地理的センス」測定度具を開発研究をしたShamai（1991）は，「場所に対する地理的センス」を個人により，そしてスケールにより異なる場所に対する感情，態度，行動と定義し，それを7つの段階に分けて概念化（第２表）した。この区分は，「場所に対する地理的センス」がいない一番低い段階から，場所のために利益を犠牲にする一番高い段階までを含む（Kim and Yoon，2013）。

第２表 Shamaiの「場所に対する地理的センス」構成要素

段階	意味
「場所に対する地理的センス」 を持っていない（not having any sense of place）	場所に対する知識や感じることがなにもない。
どのような場所に位置しているのかに関する知識（knowledge of being located in a place）	他のところと区別できる場所に住んで，そこの象徴的なものを理解するが，その場所に対する感情はない。場所は住所及び位置以上の意味はない。
場所に所属している感覚（belonging to a place）	その場所に所属していると感じること。「共にする」と共同運命に対して感じている。

場所に対する愛着 （attachment to a place）	高いレベルでの場所に対する感情的愛着。場所は個人的で集団的な経験の中心である。
場所が目指している目的を認識 （identifying with the place goals）	場所に対して，その場所のほとんどの人々が共通の目的を認識し，その目的に従って行動する。
場所への関わり （involvement in a place）	場所に対してなんでも捧げることをもとに，その場所のために積極的に役割を行う。前の段階が感情に基盤していたら，この段階は，実際的行動を伴う。
場所のために犠牲 （sacrifice for a place）	「場所に対する地理的センス」が一番高い究極的段階。場所のために個人的，集団的利益を喜んで捧げる。

（Shamai（1991）より筆者要約）

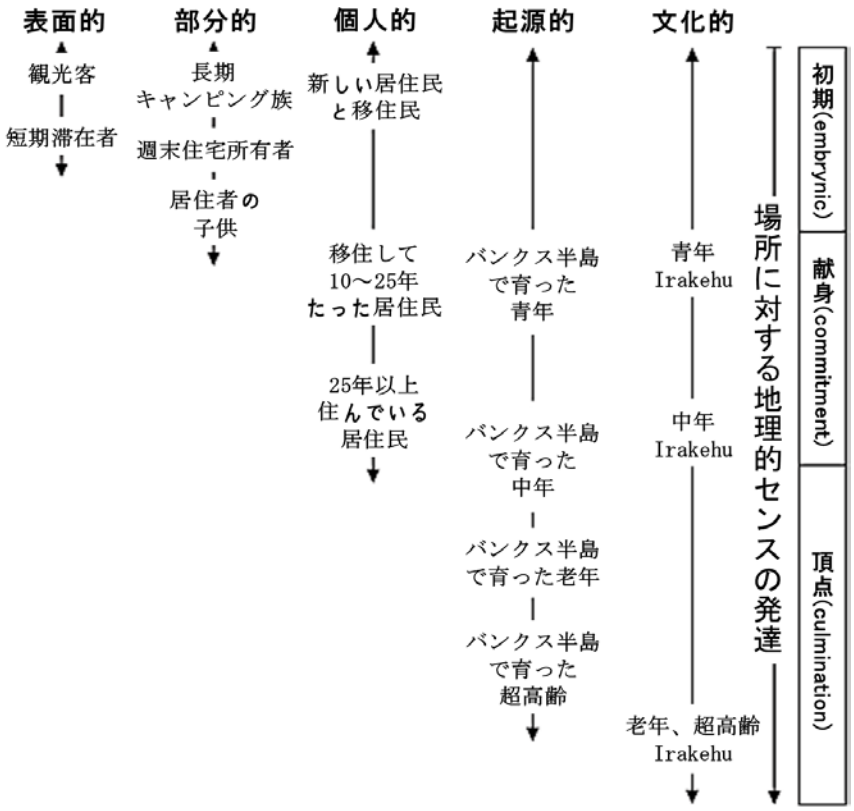
Hay（1998）は，ニュージーランドのバンクス半島（Banks peninsula）地域を事例とし居住状態による「場所に対する地理的センス」の発達を研究した（Kim and Yoon, 2013）。この研究は「場所に対する地理的センス」の発達を地位に対する居住と生涯発達的な側面から接近して分析した（第１図）。それぞれの「場所に対する地理的センス」発達段階の特徴は第３表のようになる。

第３表 Hayの「場所に対する地理的センス」類型の特徴

表面的 （Superficial）	部分的 （Partial）	個人的 （Personal）	起源的 （Ancestral）	文化的 （Cultural）
地域の景色がどれぐらい美しいか，施設や設備がどれぐらいなされているかなどに関した感情だけを持っていて，バンクス半島に対する絆（連帯感）は非常に低い。	表面的（Superficial）よりは愛着を持っているが，まだ低い。自分と関連がある部分的なところだけ強い愛着を感じる。	居住期間が長くなるほど愛着がより深くなるけれど，頂点段階までは発達できない。	「場所に対する地理的センス」の頂点段階に到達する。	「場所に対する地理的センス」を頂点段階まで持つことはもちろん，さらに深い文化的な連携を持っている。

観光客， 短期滞在者	キャンプ族，週末ごとに訪ねる人々，住民の子供たち	バンクス半島 に移住した人々	バンクス半島で生まれ育った人々	バンクス半島のマオリ（Irakehu）

（Hay（1998）をもとに筆者要約）



第１図　Hayの「場所に対する地理的センス」類型と発達
（Hay（1998）より引用（筆者和訳））

地理教育の研究としては，Kim and Yoon（2013）が韓国の初等学生（日本の小学生）を対象として「場所に対する地理的センス」の測定度具の開発と，それを適用し分析した研究がある。この研究は，「場所に対する地理的センス」に対する人間主義地理学及び地理教育の研究成果を基に「場所に対する地理的センス」の構成要素を具体化した。その結果，「私たちの街に対し考えて調べて見よう。」の測定道具の質問紙を製作するによって，３つの「場所に対する地理的センス」下位構成領域を提示した。その３つの領域は，「場所に対する認知（認知的領域）」，「場所に向けた愛着（情意的領域）」，「場所のために実践（行動的領域）」である。

Ⅳ．粟島小・中学校の学習者の「場所に対する地理的センス」

1．場所に対する認知（認知的領域）

個人が場所に対していかに具体的な知識を持っているかと関して「場所に対する地理的センス」の認知的領域が，粟島浦小・中学校の学習者にどのように成されているのかを「**この写真（参考資料１）を見て，どこなのか教えてください。**」を通して把握しようとした。そのために，学習者の慣れた，上が北方向の衛星写真ではないものを提示した。慣れてない条件の衛星写真にもかかわらず，島の主な2つの集落の中でひとつである「釜谷」と海岸段丘である「牧平」の衛星写真を把握しているかをインタビューなかで行い，その結果を分析した。特に，「牧平」は，パブリックジオグラフィーで海岸段丘として呼ばれるところの写真が，学習者のプライベートジオグラフィーとしてはどのようになっているのかを焦点を当てていた。

学習者たちは，写真を見た瞬間，最初はすべての学年の学習者が「上が北」という慣れている認識で方向を探すのに時間がかかったが，その地域がどこかを探す中で正確な方向把握ができた。中学校1～3年の学習者たちは，衛星写真を「上が北」になるように写真の方向を自由に転換しながら，地域を把握していた。以下の内容は，実際に学習者の発話である。

〔写真①－釜谷〕に関して

小5 **A**：端っこだね。

B：ここで，夕方家族でドライブするときにサギを見たことある。私より大きい鳥。そしてオオミズナゲ鳥も見た。ここで。

C：花火をやってね。畑もあるし。

調査者：畑？何を育てるのか知ってる？

小5 **B**：野菜，果物，レタス，キャベツ，サツマイモ，紫芋，ピーマン，ナス，さやエンド，枝豆，かぼちゃ

中1：牧平！畑がいっぱい，花火したところだね。ヘリポートもあるし。

中2，3 **D**：ヘリポートがある。花火したところだね。

E：高崎がこの辺だから…ここは牧平じゃない？

〔写真②－牧平〕に関して

小5：ハゲノ浜で海水浴した。あそこはおばちゃんの畑があるところだね。

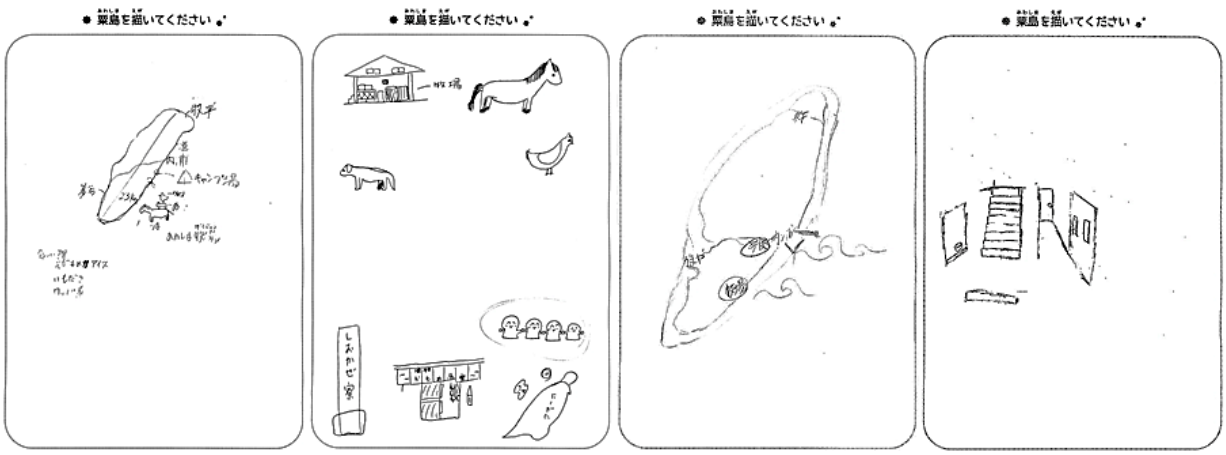
中**1**：**8m**のところだね。海水浴したところ。あそこは，入っちゃだめだといったところだね。 カモメがあるところだね。アイスがおいしい。 中**2**：あそこの道路の模様が釜谷だね。内浦は反対なのに。釜谷の岩場。ここで泳ぎすると生き物がいっぱいだね。

学習者同士の発話を見ると，自分の経験から話をする過程を通して地域の位置を合わせていく姿をみせた。学習者の特別な経験が特定の場所と連携していて，プライベートジオグラフィーを構成していることが現れる。例えば，「釜谷」は，海水浴をした場所として，目になじんでいる道路から，おいしいアイス屋さんいる場所として，おばちゃんの畑がいる場所として認識されていた。「牧平」は，珍しい鳥を見た場所として，お父さんや親戚の畑がいる場所として，花火をした場所として，学習者に認識されていた。つまり，比較的に客観的な地理情報である衛星写真と実際の生活世界である，地域としてその位置を把握するときに，認識する人，つまり学習者の主観的な経験を利用していた。

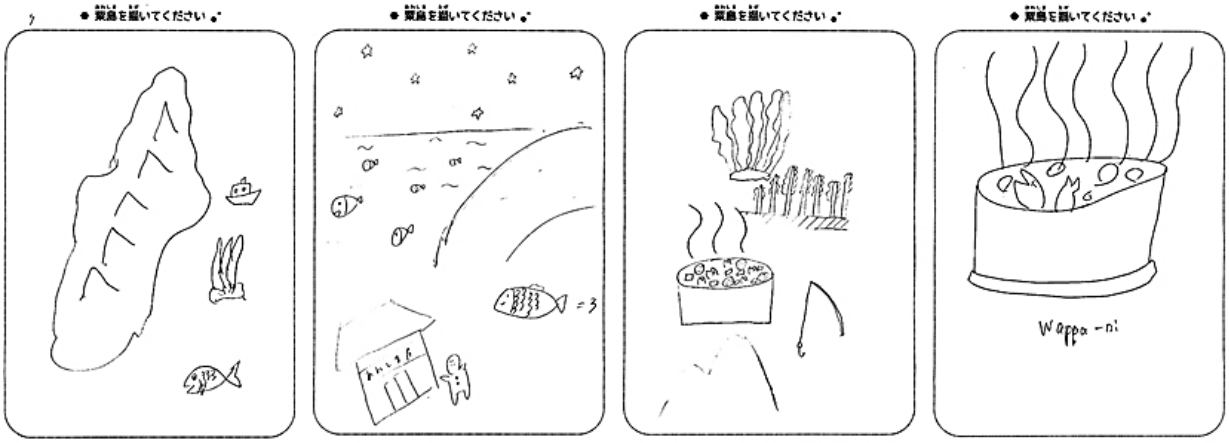
2. 場所に向けた愛着（情意的領域）

場所にどのような愛情と一体感を持っているかに関した「場所に対する地理的センス」の情意的領域に当たる内容を知るために，「**粟島に関して思い出すものを自由に描いてください。**」の描き活動と「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」の質問を実施し，その結果を分析した。

まず，描き活動から見た粟島の学習者の「場所に対する地理的センス」は主に，「自然」と「牧場（馬）」である（第２図，第３図）。



第２図 中1の学習者から見た粟島



第３図 中2，3の学習者から見た粟島

そして，「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」という質問に対して「粟島を紹介したい」学習者には，その紹介したいと思う内容に関しても聞いて見た。その結果，自分の経験からの紹介したい内容を詳しく語った。その経験を東京の友達にも感じてほしいという答えもあった。下の内容は，「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」に対し他聞き取り調査の発話内容である。

調査者：何を紹介したいですか？
小5 **A**，**B**，**C**：海，山，鳥，魚，食材，馬
調査者：なんで紹介したい？
小5 **B**：鳥があるイメージがないと思って。
A:魚はいっぱい色んな週類があるから。
B:鹿，かわいい蛇と，山菜がいっぱいある。山でおばちゃんがいっぱいくれる。

調査者：聞かれたら，何を紹介したいですか？
中1 **H**：馬，生まれたばかりの馬がかわいい。
I：海，みずがきれい。海水浴したときにみたら。
J：牧場

調査者：何を紹介したいですか？
中3：いっぱいある…。

D：海，きれいだから。わっぱに，魚，おいしいだから。
E：島の人が優しい。自然，山もきれいだろし，森もきれいだろし。
F：枝豆アイス
G：車が少ない。だから道で野球ができる。

自分自身が海水浴してみた海や，一番時間を過ごしている牧場が主に挙げられていた。

「場所に向けた愛着（情意的領域）」も認知的領域と同じく，粟島での学習者の経験を基にした描，そして紹介したい内容も経験を基にしていた。特に，粟島を描くことに当たって，自分の部屋や寮を描いた学習者（第2図の左から4番目の絵）は，まさにその学習者が主に粟島で時間を過ごしている場所を素直に描いていたと考えられる。つまり，粟島で主に時間を過ごして経験している場所は，島を全体的に描いた学習者から自分の部屋まで，個人の生活世界を如実に表わしている。

この二つの質問の答えを見ると，粟島学習者たちの経験を基にした生活世界として，「場所に対する地理的センス」の情意的領域は大きく2つと分けられる。一つ目，粟島で経験した場所（例えば，牧場，自分の部屋，寮，学校周辺など）か，二つ目，経験したそのもの自体（例えば，郷土料理のわっぱ煮，海水浴，わかめ収穫体験）が現れている。

3. 場所のために実践（行動的領域）

どのようにその場所とために行動して，自分を犠牲しようとする意思を見せるのかと関連した「場所に対する地理的センス」の行動的領域に当たる内容は，Kim and Yoon（2013）で開発された測定度具から「行動的領域」として開発されている質問である「私の村を他の人たちに紹介したい」を修正した「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」質問からで分かる。

前述したHay（1998）の研究によると，諸地域で生まれたりその地域と文化的な連携を持っている人と，そうではない人たちは「場所に対する地理的センス」の違いが存在することが明らかとなっている。そして，その違いは，居住状態と居住期間やその場所で過ごした時間によって段階として現れていることを明らかにしている。

本調査でもHay（1998）の研究結果と同様なことが指摘できる。粟島浦小・中学校の学習者の居住状態は，３つで分けられる。粟島で生まれ育った学習者，粟島での5～6年前から住みはじめた学習者，そして「しおかぜ留学」で粟島に来て1年～1年6か月になった学習者と分けられる。そこで，Hay（1998）の結果のように，粟島の学習者も居住状態の違いから「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」の質問に対する積極性が違っていた。

つまり，全員「しおかぜ留学」生で構成していた学年と，粟島で生まれ育った学習者と居住期間が5～6年になる学習者が含まれている学年は，「**東京に住んでいる友達に粟島を紹介したいんですか？**」の答えの積極性でその違いが現れた。前者の学習者たちは，「相手が粟島に聞かれてくると紹介したい」ていう条件的な答えだった。一方，後者の学習者たちは，「もちろん紹介したい」答えが支配的であった。このような調査の結果，学習者の居住状態により「場所に対する地理的センス」の行動的領域はその違いが存在していた。

Ⅴ．おわりに

人間主義地理教育の立場からの地理授業は，学習者の「プライベートジオグラフィー」と教育課程や教科書などのような「パブリックジオグラフィー」を教師が媒介する過程である（Kwon，2015）。このような地理教育で学習者のプライベートジオグラフィーとパブリックジオグラフィーを連携のためには，学習経験を提供する身近な地域，つまり学習者の生活世界を理解する必要がある。そして，それを基盤とした地理学習が行われるようにするのか必要である。

特に，小学校社会科から中学校社会科地理的分野まで，同心円的に身近な地域から連携するためには，学習者の生活世界を把握し，パブリックジオグラフィーと連結ができるようにする必要がある。

このような側面から見たときに，本研究で明らかになった粟島の学習者のプライベートジオグラフィーの特徴は，大きく2つに整理することができる。第一に，「場所に対する地理的センス」の認知的領域（場所に対する認知）と情意的領域（場所に向けた愛着）としては，学習者が粟島で直接に経験したものを基に構成されていた。その内容は，身近な地域と関連する「自然（山，海）」と「牧場（馬）」が中心である。

第二に，「場所に対する地理的センス」の行動的領域（場所のために実践）としては，居住状態により，答え方の背極性が違っていた。これは，Hay（1998）の研究で指摘されたことと同じである。しかし，「場所に対する地理的センス」（紹介したい粟島の姿）の内容は，居住状態による違いはなく，どの居住状態の学習者も地域から自分が経験してものを基としていた。

このような，粟島の学習者のプライベートジオグラフィーが持つ意味は，学習者のプライベートジオグラフィー（場所に対する地理的センス）を把握し，学習者をより深く理解することが可能である。さらに，地域を基盤としている学習者の生活世界（プライベートジオグラフィー）を理解し，身近な地域からはじまる小学校社会科（パブリックジオグラフィー）を学習するときに，お互いのフィードバックが上手く回るために必要であると考えられる。プライベートジオグラフィーとパブ

リックジオグラフィーがフィードバックすることで，学習者のプライベートジオグラフィーの拡張や深化できる手がかりとして考えられる。

さらに，「場所に対する地理的センス」は，その構成要素の中の一つである，「場所に対するアイデンティティ（place identity）」，「場所への愛着（place attachment）」との関係から学習者の「自我肯定感」に肯定的な影響を及ぼすこともできる（Lim, 2011）。

パブリックジオグラフィーとの連携を考えてみると，身近な地域に対する自然（山，海），地域産業（牧場，観光業）との関連付けの可能性があると考えられる。学習者のプライベートジオグラフィーが地域と関連されていることから，授業のなかでの問いかけなどを通して学習者の経験を用いて，パブリックジオグラフィーとの連結できる授業構想が必要であると考える。

地域は，学習者の生活世界を構成している。そのため，どのような地域で生活しているかにより，学習者のプライベートジオグラフィーは違う。その意味から本研究は，「粟島」という地域が，学習者の生活世界としてどのようにプライベートジオグラフィー，特に「場所に対する地理的センス」として現れているのかを理解しようとした。結果的に，小学校の身近な地域からはじまる社会科の学習（パブリックジオグラフィー）をより促進し，学習者個人のプライベートジオグラフィーを拡張する方法として，学習者のプライベートジオグラフィーを理解することは重要だと考える。

謝辞

本研究のために，協力していただいた粟島浦小・中学校の校長，教頭先生はじめ，先生の皆様，そして，何よりも質問に素直に話していただいた，今年は6年になる粟島浦小学生５年生の皆様，粟島浦中学生の皆様には大変お世話になりました。深く御礼を申し上げます。

注

1）Kwon（2011)によると，Matless（1997）は，時空間の状況と脈絡が自我認識に影響を与えることを強調し，地理的自我（geographical self）という概念を提示した。また，Sack（1997）は，人間は必ず肉体を持つ上，状況制約を持つことは当然だと主張した。物質と環境・空間的脈絡の中で意思決定や判断などをする中，地理が重要な契機となることを強調しながら地理的自我論を発展した。他にもAdams（2005）は，Sackの議論を補完的な立場から受け入れ，アイデンティティの境界を超える拡張を目指すことが人間の本質であると主張した。

そして，Romey and Elberty（1984）によると，地理的自我として学習者は，地

理学の世界から成長し，生まれつきの地理学者として地理的感覚を持っている。たから，地理教育は，学習者を地理的自我として認識し，彼らの「地理的感覚と潜在力」を再発見できるように助けなければならない（Cho and Kwon，2005）。

2）トゥアン（山本　訳，1988）によると「空間の感覚」と翻訳されている。それ以外にも「場所性」，「場所の特徴」などにも翻訳されることもある。頭文字だけで「SOP」と呼ばれることもある。本研究では，1992年にInternational Geographical UnionのCommission on Geographical Educationが提唱した「International Charter on Geographical Education（地理教育国際憲章）」の翻訳における「場所に対する地理的センス」に応じる。

この概念は，人間の経験を通して未知の空間が場所に変わり，見知らぬ抽象的な空間（abstract space）が意味ある具体的な場所（concrete place）になり，無味乾燥し無意味した物理的な空間が親密な場所として感じるときに「場所に対する地理的センス」が形成せれる（Lim，2011）。

3）Lim(2011)によると，場所は，そこに意味付けした人々に「場所に対するアイデンティティ」を形成し，人間は場所を通して社会化され自分自身を説明することができるから，「場所に対するアイデンティティ」は「自己のアイデンティティ」に密接な関連があると言える。プライベートジオグラフィー（場所に対する地理的センス）は，「場所に対するアイデンティティ」に影響を与えて，学習者の「自我肯定感」にも肯定的な影響を及ぼす。

さらに，Per Gustafson（2001）の「場所に対するアイデンティティ」とスケールの関する研究によると，身近なスケール（街，近隣以下）では自我と関連した場所の意味が多いが，国や大陸などの比較的大きなスケールは他者及び全版的な環境と関連したアイデンティティと関連が深いと述べている。つまり，この研究の結果によると，地域のスケールが小さいほど自我と関連した場所の意味は強くなる。

文献

金　玹辰（2012）:『地理カリキュラムの国際比較研究 ： 地理的探究に基づく学習の視点から』，学文社.

トゥアン，イーフー，山本　浩訳（1988）:『空間の経験―身体から都市へ―』，筑摩書房. ; Tuan，Yi-Fu（1977）: *Space and Place －The Perspective of Experience*, University of Minnesota Press.

レルフ，E.，高野岳彦 ほか訳（1991）:『場所の現象学 ： 没場所性を越えて』，筑摩書房. ; Relph，Edward（1976）: *Place and Placelessness*，Pion.

南　相駿（1999）: *地理教育의 探究*. 教育科學社（Korean）

Cho, Chul-Ki and Kwon, Jung-Hwa (2005) : A Learner as Geographical Self and Geographical Inquiry-based Learning, *Journal of Geographic and Environmental Education*, **13** (3), pp. 333-347. (Korean)

Fien, John (1983) : Humanistic geography, in J. Huckle, ed., *Geographical Education: Reflection and Action*, Oxford University Press, pp.43-55.

Fien, John and Slater, Francis (1983) : Behavioural geography, in J. Huckle, ed., *Geographical Education: Reflection and Action*, Oxford University Press, pp. 30-42.

Hay, Robert (1998) : Sense of place in developmental context, *Journal of environmental psychology*, **18** (1), pp. 5-29.

IGU・CGE (1992) : The International Charter on Geographical Education. 中山修一 (訳) (1993) : 地理教育国際憲章, 地理科学, **48** (2), pp. 104-119.

Jorgensen, Bradley S. and Stedman, Richard C. (2001) : Sense of place as an attitude: Lakeshore owners attitudes toward their properties, *Journal of environmental psychology*, **21** (3), pp. 233-248.

Kim, Minsung and Yoon, Okkyong (2013) : Development and Application of a Sense of Place Test Instrument: A Case Study of Gender Differences of Elementary Students, *Journal of Geographic and Environmental Education*, **21** (2), pp. 17-28. (Korean)

Kwon, Jung-Hwa (1997a) : The logic of regional comprehension and the construction of the content for the regional studies in education, Ph.D. diss., Seoul National University. (Korean)

Kwon, Jung-Hwa (1997b) : Regional Geography in Education and the Learning Theories, *Journal of the Korean Geographical Society*, **32** (4), pp. 511-520. (Korean)

Kwon, Jung-Hwa (2011) : Awakening the Geographical Self and Understanding the Lifeworld : Its Implication for Geography Education, *Social Science Education Research (Korea National University Of Education)*, (13), pp. 70-89. (Korean)

Kwon, Jung-Hwa (2015) : *Lecture notes on geography education*, Purungil. (Korean)

Lim, EunJin (2011) : Education of Self-identity Based on Place, *Journal of Geographic and Environmental Education*, **19** (2), pp. 107-121. (Korean)

Lowenthal, David (1961) : Geography, Experience, and Imagination: Towards a Geographical Epistemology, *Annals of the Association of American Geographers*, **51**

（3），pp. 241−260.

Ryu, Jae−Myong（2002）: Developing Geography Lesson Plans to Integrate Students' Everyday Experiences to Classroom Learning Activities, *Journal of Geographic and Environmental Education*, **10**（3），pp.1−16.(Korean)

Seo, Tae−Yeol（2005）: *Understanding implementing the geographical education*, Hanul Academy.（Korean）

Shamai, Shmuel（1991）: Sense of place：An empirical measurement, *Geoforum*, **22**（3），pp. 347−358.

Williams, D. R. and Vaske, J. J.(2003）: The measurement of place attachment: Validity and generalizability of a psychometric approach, *Forest Science*, **49**(6), pp. 830−840.

参考資料 1

写真①

写真②